平成30年度春期　金沢シーサイドタウン地区推進連絡会要旨

１　日時
　平成３０年４月１４日（土）　１０：００～１３：００
２　場所
　並木コミュニティハウス
３　参加者　６６名
　（地域側）
　　連合自治会、地区社協、コレナミ、地域団体　　３６名
　　小中学校、養護学校校長、副校長、ＰＴＡ　　１２名
　（局・区役所、支援チーム）
　　区役所　　３名
　　地域支援チーム　　１５名

【Ｉ】全体会
１　あいさつ
金沢シーサイドタウン地区社会福祉協議会　会長　増田　一行
⇒本日の３つのテーマはどれも重いテーマだが皆さんにいろいろ発言していただきたい。地区推進連絡会は春期、秋期と年２回開催しているが、当日の話し合いのみで終わってしまっている気がしている。課題をどのように深めて解決していけるかが重要なので、当日のみの話し合いにならない為にはどうしたら良いか探っていきたい。
金沢土木事務所　所長　脇本　景
２　出席者紹介
シーサイドタウン地区内の小中学校及び養護学校の校長、副校長のみ紹介
３　区役所資料説明
（１）平成30年度金沢区「個性ある区づくり推進費」予算について
（２）平成30年度金沢区内の主要事業について
（３）平成30年度金沢区内市民活動に関する補助金一覧
４　関連報告事項
（１）これからの並木を創る会　活動報告
⇒コレナミを始めて５年が経過した。コレナミの趣旨は10年後20年後の並木を考え、今できることからやっていこうと開始した。その活動の一つとして未来に向かって魅力的な街であり続けることが重要であるとして、一緒に活動する仲間を増やすことに力を入れ、住民参加型イベント等を実施してきた。コレナミは平成29年度末で補助金が終了し、第2段階に入る。この５年間の活動から、並木への提言として冊子を作成した。今後は若い世代とのつながりが重要になると考えている。
（２）地域福祉保健計画地区別計画・平成29年秋期地区推進連絡会のまとめについて
⇒地区推進連絡会は行政と地域が集まって地域課題について話し合う場で、シーサイドタウン地区では春期は様々な方にそれぞれの立場からの意見を聞く場として、秋期はテーマを絞って話し合いを深める場として位置づけている。
⇒平成２９年度に話し合われた内容は老々介護の問題や地域行事に参加しない人をどうするかなどが話し合われた。どちらも解決は難しいがお互いが気にしながら行事に参加しない人にも根気づよく声かけをする必要があるのではないか。また、その時に同じ立場であることを忘れないで行動することが大事である。
他にも、ハード面の問題も毎回でてくるが、現在まだ地域としての活動は進んでいな

い。今後の課題のままである。

【Ⅱ】Ａ／Ｂ／Ｃ班別話し合い

５　意見交換

Ａ、Ｂ、Ｃの 3 班に分かれ、身の回りで気になっていることの他、次の３つのテーマに沿って、情報を共有し、今後力を入れていきたいこと、という視点に基づく意見交換を行った。

【Ⅲ】全体会

６　話し合いの発表

＜Ａ班（子ども達を取り巻く環境について）＞

Ａ班では３つのテーマに絞った。

①小学校高学年のあそび場がない

・未就学児のあそび場は多いが小学校高学年が自由に遊べる場がない。産業団地等が可能性があるという意見があった。産業団地の経営者に世代交代が進んでおり、交流の一環として場所の提供も考えている。スケボー等の音が出る遊びにも対応できるのではないか。

②外国につながる子ども達の支援について

・小学校では外国につながる子ども達が増加しており、別教室での授業も行っている。中学生になると進路の問題も出てくるが、三者面談の時は国際交流ラウンジの協力を得て、通訳に同席してもらうこともある。

・子どもは順応性が高いが、両親は時間がかかる。両親とも言葉の壁がある場合は地域社会とのコミュニケーションをとることが困難なこともあり、言葉が分かる子どもが親の代わりをするなど子どもが親をサポートしている例も少なくない。地域でこの問題も支援していく必要がある。

③子どもの貧困、シングル家庭の支援について

・子どもの貧困対策として「こども食堂」の話を聞くが、財源や開催場所等の課題や、本当に必要な家庭にその情報が届くのかといった課題がある。周りの目がプレッシャーに感じることもあるのではないか。施策はあるがうまく機能していない面がある。

・子どもの抱える問題には、貧困、片親、ネグレクトなど様々あるが、学校が解決に導くことは難しい。学校では課題解決に向けて、福祉との関係をつなぐ努力を行っている。

・全体を通じて、違う環境の人が近くにいるという考え方は差別につながることもある。地域は公平な目で見守りの姿勢を持つことが重要。

・向こうから相談して貰えるような雰囲気作りが大切で、こちらから、大丈夫か、何かないかと言いすぎないよう心がけたいと思っている。

＜Ｂ班（認知症について）＞

・誰もがなり得る認知症について、まだまだ認識に個人差があることを感じた。

・認知症の方に優しい社会は、誰に対しても優しい社会であるといえる。認知症の方を家族だけで支えるのはとても大変なので、抱え込ませない地域づくりが重要である。

・地域内の連携や公的機関とのつながりを持つことで、早期発見や問題解決に結びつくことが考えられる。民生委員、各サロングループ、ボランティア団体、シニアクラブ、自治会など、多種多様なつながりが多ければ多いほどいい。介護者の集いなど当事者同士の悩み

や情報共有をする場を自治会などの範囲でもできると良いのではないか。

・自治会等の範囲で啓発活動を行うことで、より深い理解を得ることが期待できる。また、子どもたちは先入観を持たず吸収する力があるので、小さい頃からの啓発も大事であると思った。保育園や小中学校で認知症サポーター養成講座を実施するボランティアグループがある。親と子で同じ講座を受けたことで家に帰って、講座の内容を子どもと共有できたことが良かったという意見もある。色々な場所での啓発活動が、受け入れられるようになると良い。

＜C班（地区内の助け合いグループについて）＞

①気になっていること

・並木にはゴミが落ちていないという話があったが、住み続けている住民は良い街にしたいとの意識が高く、散歩時にゴミ拾いをしている人をよく見かける。また、推進員もごみの分別や、ゴミ拾い・タバコのポイ捨てなど常に活動している。

・ふれあい広場「ほのぼの」を毎週木曜日に開設している。情報提供や出入り自由の拠点で、話し相手を求めて通ってくる方も多い。しかし、1週間に1度の開設のため、どのような施設なのかが周知しきれていないのが勿体ない。

・子どもの減少により、自治会の子ども会や野球チームの維持が難しくなっているという課題や、高層階ではエレベーターの有無で外出するということが全く違うという生活課題がある。

・最近は、両親とも働く家庭が増え、家事も仕事も子育てもと忙しい。また子ども達もお稽古や塾通いなどもあり、若い世代は子どもも大人もとても忙しい。

②助け合いの仕組みづくりについて

・一人暮らしの高齢者が増えている。介護保険法が改正され、ちょっとしたことに対する手伝いを、お互い様としていける地域が求められている。困ったときにちょっと声をかけることができる組織づくり（ちょいボラ）を始めようと準備を進めている。地区社協ニュースに「ちょいボラ」の取組が掲載されているので、手伝いのお仲間が増えることを期待している。

・助け合いボランティア団体については、以前、自治会内で取り組んだがうまくいかなかった。全く無償だと頼みづらいし、近所の人に頼むばかりというのも苦しいという声もあるので、広域で助け合えるボランティアグループの仕組みづくりができると良い。

・もう10年以上も前から自治会で取り組んでおり、知り合いだからこそ困りごとを頼めるという関係作りができている自治会もある。しかし、新しい仲間が増えなくて、限界も少し感じている。

・ボランティアグループは現在コーディネーターの人材が不足しているので、これから研修や声掛けを続け、人数を増やしていきたい。

7　閉会のあいさつ

金沢シーサイドタウン地区社会福祉協議会 副会長　金沢　政行

⇒これからも今日話し合われた課題を前向きに考えていきたい。